

平成26年度中学生・高校生の国際理解・国際交流論文
高等学校の部 最優秀賞



学べる喜びと私の夢

福島県立白河高等学校
1年 鈴木 愛望

「12歳で花嫁に。16歳で母親に。41歳で識字者に。」

発展途上国の抱える教育問題について調べていた時、私はこの言葉と出会った。彼女の名前はタラマティ・ハリジャン。彼女は幼い頃学校に通えず、家事をこなす生活をしていた。現在の私の生活とは似ても似つかない生活である。私が驚いたのは、彼女は寺子屋に通い41歳で識字者となったからだ。彼女は16歳の時、つまり、今の私と同じ年齢の時に子供を出産し、母親となっている。もしも私が彼女と同じ境遇なら、寺子屋には行かないであろう。しかし彼女は寺子屋で読み書きを学び、女性の権利を守る活動に参加しているのだ。寺子屋が一人の女性の人生を変え、他の誰かの人生を変えていくのだ。

今、世界の成人のおよそ6人に1人は読み書きができない。戦争や貧困、女性であるという理由だけで教育を受けられない。これが世界の現実である。私は数多くある問題の中で、貧困で教育を受けられない子どもたちを救いたい。発展途上国の子どもたちは、学校を辞めたくて辞めるわけではない。学校の数が少なく、遠すぎて通えないのだ。また、先生という職業に人気がなく、教員の数が少ないのだ。教員の給料は国から支払われるのだが、国の予算が足りず、十分な給料を払っていないのである。学校と教員の数が少ないと、教育を受けたくても受けられない子どもたちは増えるばかりである。私は勉強をしたいと思っている子どもたちに勉強をする環境を整え、教育を受けさせることが、発展途上国を豊かにする鍵だと考える。

「貧困による負の連鎖」というものがある。教育を受けられないことで、読み書き・計算ができないまま育ってしまい、仕事に就けず、収入が少ない状態が続いてしまう。さらに、本人や子どもが教育を受けられなくなる。という悪循環が続いてしまうのである。この負の連鎖の根本的な問題は教育である。「基礎教育」と呼ばれる、字が読める。字が書ける。計算ができる。といった、人間が社会の中で生きていくうえで、最低限必要なことを学ぶことが大切である。基礎教育が不足してしまうと、お金や財産のやりとりで騙されたり、家庭にある薬の説明が読めず、正しい量と方法で飲めない。などといった、日常生活にも支障が出てくるのである。また、基礎教育ができていないと、次の中等教育、高等教育に進めないため、国を担う人材が不足し、国の成長が阻害されてしまうのだ。義務教

育制度のある私の住む日本では、字の読み書きや計算は、できることが当たり前を感じる
が、それは恵まれた環境にいるからこそ感じられる「学ぶ」「知る」という幸せなのであ
る。

タラマティさんのように、16歳未満での若い女の子の結婚は、貧しい国では珍しくは
ない。愛し合って結婚するというより、家が貧しいため、男性側からの結婚支度金などと
いった理由からだ。結婚をして、家事や育児に追われると、もはや学校に行くどころでは
ない。結婚をしていなくても、兄弟姉妹がたくさんいる場合、女の子は家事や小さい子の
面倒を見なくてはいけないため、男の子が優先されてしまうこともあるのである。伝統的
な男尊女卑の習慣が残っているのだ。そのため、学校に行きたくても行けない、という女
の子が多くなっているのだ。子どもが勉強できる家庭環境も必要なのだ。

子どもたちの就学率を上げるためには、子どもが教育を受けることのメリットを親に丁
寧に説明し、親の意識を改革していく必要がある。国や地域がどれだけ努力をしても、親
の理解が無いと学校には通えないのである。また、国は教室や通学路の環境を整備し、生
徒が安心して学校に通学でき、親が安心して子どもを預けられるように環境を整えるべき
である。

今の私はとても恵まれた環境で生活している。学校へ行き教育を受け、食事を取る。ご
く当たり前の生活が、実はとても恵まれていることには気付かない。それは、日本が平和
な国だからである。勉強が苦手な人はいるが、義務教育制度のおかげで基礎教育は学べる。
近所にも沢山の学校があり、多くの先生方がいる。この日本では当たり前の「学習できる
喜び」を私は、全世界に広めたい。学びたいと言う子どもたち全てに学ぶ権利はある。私
は学ぶ意欲のある、発展途上国の子どもたちの声を見捨てることは出来ない。高校生の私
に出来ること。それは、世界について知る事である。そして、発展途上国に学校を建築す
るための募金活動に協力することだ。まだ高校生の私には小さな事しかできない。しかし
この小さな一歩が積み重なり、いつかは発展途上国に学校が建設され、その学校で多くの
子どもたちに学ぶことの喜びと、勉強が分かった時の嬉しそうな「笑顔」を一人でも多く
の子に与えることが私の夢だ。タラマティさんが、識字者として一歩踏み出したように、
私も一歩踏み出してみたいと思う。発展途上国の多くの問題を、「教育」という立場から
救う。とても大変な道のりだが、一歩一歩進んで行きたい。明るい世界の未来を信じて。